

正十一年一月十二日上海発の北野丸で帰国の途についた。この旅行は西崖にとって満足すべきものとなったが、それは資料収集の目的が果たせたというだけでなく、自著の『支那絵画小史』（大正十年本校の教科書に用いられた。）が五、六年前に上海で翻訳出版され、それが支那の師範学校の新教科書にそっくり引用されるなど、自分の著書学説が支那に行われているのを自分で確かめたこと、および、北京には本校の卒業生が五、六人も居り、特に上海では本校生汪亜塵（卒業期）が案内役を勤めてくれたりしたためでもあった。西崖はこの旅行を機に日中美術交流運動に乗り出すことになった。前出「支那歴遊談」のなかで、

私共は支那を研究して、日本の藝術文學を益するばかりでなく進んで支那へ乗り込んで支那の文化の歴史の上に足跡を遺さなければなりません、さうすれば初めて此大陸の文化史の上に、日本人の仕事が遺る譯になるのであるから、此狭い國の中で、何會だの何黨だのと互に鎬を削つて喧嘩をしたりばかりして居ないで、どんどん諸君は支那へ乗出したが宜からうと思ひます、さうして大陸の文化史に足跡を止めるやうにすることを希望します、

と言っているが、これは中国の文化史に深い憧憬の念を持つ西崖の、あくまでも学者としての誠実な心情からする提案であった。

西崖はこれ以後昭和二年に死去するまでにさらに四回の中国旅行を試み、研究資料の蒐集と中国の画家や学者たちとの交流につとめた。大正十一年二月には第一回旅行で蒐集した中国現代画家の作品

と小伝を編集して『禹域今画録』として日本に紹介し、一方、上海では西崖の『文人画の復興』の漢訳と陳衡恪著「文人画之價值」を合わせた『中国文人画之研究』が発行された。特に『文人画の復興』は同時代の中国画壇の新旧両派双方から理論的支柱として引用され、近年本書について中国で多くの研究論文が発表されているという。大正十二年四月の中国旅行の際は上海の画家呉昌碩、王一亭、唐吉生らと日支美術倶楽部設立を計画し、西湖有美書画社としてそれを実現させた。また、同十四年一月には北京大学で講演し、沈兼士、張鳳挙、陳垣、馬衡、沈尹默、鄧以蜚、錢稻孫、蔣夢麟、胡適、葉翰、馬裕藻ら同大学の学者たちと交流した。同年五月刊行の名著『東洋美術史』には長年の蓄積とこれらの旅行の成果が盛り込まれている。最後の旅行は大正十五年四、五月で、それは蘇州角直鎮の保聖寺を見るのが目的であった。『塑壁残影』に旅行の概要が記されている。なお、西崖の中国旅行の詳細は吉田千鶴子著「大村西崖と中国」（『東京芸術大学美術学部紀要』第二十九号）を参照されたい。

⑮ 『東京美術学校校友会月報』第二十卷記念号

校友会機関誌『東京美術学校校友会月報』は明治三十五年六月の創刊以来大正十年五月を以て第二十卷目を迎え、校友会はこれを記念してその第一号を第二十卷記念号として発行した。表紙絵には岡田三郎助筆の唐花模様を用い、口絵には正木直彦校長の肖像写真と美術部、工芸部両校舎の写真を用いている。論説欄の構成は次のとおりである。

二十年間の回顧

回旧談

雑感二三

所感

月報の追憶と校友会の奮起を望む

研究科時代の回顧

近頃愉快なる一製作

日常生活と建築家と工芸家

ロダンと他の彫刻家（エピソード三つ）

芸術普遍の正道

新風景画の基礎として見たる絵巻物（補遺）

武英殿鑑賞

文化生活者としての美術家（上）

二十年このかた

正木 直彦

高村 光雲

結城 素明

神木 健介

津田 信夫

清水 亀蔵

渡辺 啓三

今 和次郎

武田 燦

内藤 伸

穴山 義平

栗原 誠

石野 隆

いもし、ほづま

このうち二十巻記念の趣旨に添って執筆されたものについて言え
ば、正木の論説は月報が二十年間継続発行され、所期のとおり「美
術の歴史の根本資料」としての意義を持つに至ったことに對する喜
びと編集者への感謝、さらなる発展の希望を述べたもの。光雲の論
説は本校創立当初の思い出と昔と今の校風の違いを述べたものであ
るが、その中で次のような注目すべき発言をしている。

開校當時は職員も昨日迄は職人と云ふ様な人が一朝にして教授
の榮職に付いたので教授法と云ふ事等は知識も無く經驗も乏しく
不安に感せられましたので傳統的な習慣を追つて家で弟子に教へ

る様に教場で職員も生徒も一處に仕事を致しました。現今の生徒
はモデルにばかり接近して先生と親蜜（密）にならず、職員も控室でつ
まらぬ話しをして居て教室には録に顔を見せませんが、當時は先
生と生徒は全く家族の様に團樂（樂）して居りました。

現在の様に子弟關係は薄らぎ萬事が官僚式に成つたのは、生徒
の數が増加した爲ばかりで無く職員の怠慢の結果で、職員が毎日
學校に來て指導して居たのが交對（交對）に休む様になり、それが公然の
秘密となりついには規則と定め被れてしまひました。ですから現
今の生徒は一寸した技（マヤ）も指導者が無くて研究する爲非常に困難
する様です。今學期からは木彫科では此の點を改良しますが、他
の科でも職務に今少し忠實でありたひと思ひます。

このように職員を叱責するなどということは最長老の光雲にして
初めてできることであつたろう。また、光雲は創立当初の普通科制
度を美術家として立つ上で必要な常識を養う上で有効であると高く
評価している。次に素明の論説は校友会機関誌の歴史を極く簡単に
述べたもの。神木の論説は将来に向けての提案であつて、特に意義
深く思われるので全文を掲げる。

所感

教授 神木 健介

吾が美術學校は、繪畫、彫刻、建築の所謂純正美術と夫等を應
用すべき工藝美術とを教授研究する機關なる事は今更申す迄もな
い事であるが、實際此の如き老大なる教育機關は、諸外國にも少
ない例であらうと考へる。然し一方には此綜合設備を充分活用さ

せたなら益々其特色を發揮し社會に貢獻する所が大なるものと想像する次第である。

然るに現在美術學校の内容は前記の綜合教育を甚だ利用して居ない様であるのは、遺憾の至りと思ふ。即ち等しく美術と云ふ以上は、どこか共通の處があるべきなのに、純正、工藝の兩美術部に屬する各科は餘りに孤立して其間に毫も連絡交渉がとれて居ない様である。今、西洋畫の例を取つて見ても、専門の洋畫科は勿論として彫刻科、建築科乃至は圖按、金工、鑄造、漆工の各科は大體各自獨特のデッサン室に割據して居る様な教授振りである。

同じ洋畫の授業に左程の相違はあるまいと思ふ。無論専門の洋畫科とは時間の多寡から云つても、又其研究の程度から論じてても、多少の斟酌を要すべきも之は單に手段方法にすぎないので、洋畫の教授といふ點に於ては何れも同等であらう。従つて之等は宜しく洋畫科教室で、洋畫科の先生方が受持たれて然るべきであらう。そうすれば各科の生徒は其時間には洋畫科に行つてデッサンをしながら専門の先生方から其道の高説をきゝながら指導を受け、いろ／＼の参考物の中で充分洋畫の氣分を味ふ事が出來て如何にも幸福と考へられる。其他日本畫、彫刻及び應用美術の實技から用器畫法の如き簡單なる講義に至る迄、之を統一併合したら授業上、研究上は勿論經濟上頗る有利な事であらう。

今自分の専門なる建築に就てかくすれば御互に非常に便利と思ふのは建築は丁度、純正美術と應用美術との接觸點にあつてその交渉が最も深い學科であるから従つて兩方面の學生は美術常識の上から當然建築に興味をもち何かと關係がついてくる様になるべ

きだと思ふ。

繪畫、彫刻が建築（所謂美術的建築なるは云ふ迄もない）の重大なる要素なると同時に、工藝美術の重大なる援助をからなければ、建築の美觀を發揮する事は容易であるまいと思ふ位だ。それにつけても現在の學校の遣り方を少し改良して實技の練習や學科の講義を、一層開放的にし、各科の學生が其専門科以外は自分の好む所に隨つて容易に他科へ出入し研究する様に仕度いものである。さうするには是非共、前に云つた様に洋畫は洋畫科で彫刻は彫刻科でといふ風に各専門の集中を希望する次第である。

次の津田の論説は月報に関する思い出と月報、學校、校友会に対する希望を述べたもので、特に教職員が一致協力の精神を以て校長の計畫遂行を助けるべきことを強調している。清水亀藏の論説は研究科時代の思い出と加納夏雄の指導法について述べたもの。いもし、ほづま（香取秀真）の論説は主に美術學校在校時代の思い出と鑄物に関する話である。